

令和2年度 第1回岡崎市農業振興ビジョン推進委員会
ユニバーサル農業推進部会 会議録

1 会議の日時及び場所

令和3年1月8日

岡崎市役所西庁舎 503号室

2 出席部会員の氏名

委員（7名）

安藤 正巳 部会員 （あいち三河農業協同組合営農企画部営農企画課長）

加藤 智子 （あいち三河農業協同組合女性部部长）

権 洵珠 （岡崎女子大学教授）

柴田 若江 （愛知県農村生活アドバイザー協会西三河支部ほほえみ会）

杉浦 ちかよ （岡崎市農業振興ビジョン推進委員会委員（市民公募））

野口 直人 （愛知県立みあい特別支援学校進路支援部主任）

藪本 真也 （社会福祉法人 愛恵協会管理者）

3 内 容

議題1 ユニバーサル農業の現状について

委員意見

・以前余ったイチゴを捨てるのがもったいないということで冷凍業者に持ち込んで冷凍するということがあったがコストが高かった。ルート構築をして、福祉事業者さんの仕事も増えて、継続していけるような仕組みができないか。必要なら補助金を入れて支援したりできないか。

・フードロス対策ということで、加工業者に出すかたちで対応をしているが、現在は原料を納めて買い戻すスタイルになってしまっており、加工費が高くついている。

できた製品の需要と供給のバランスが取れず、農家の負担となってしまうている。素材を提供できる方と福祉事業者のマッチングができればよいと思う。

福祉事業者さんにも制度改正されるHACCP（ハサップ）など衛生基準にのっとり事故のないようにやっていただけるのであればマッチングしやすい。

・子ども食堂は現在、市内に11か所あり、とても勢いがある。食材の寄付、手配についてはフードバンクのほか、企業、個人事業のスーパー等からの提供もあり、食材の寄付や手配については意外に困っていないが、全体を見て必要なものを必要ところへ、必要なタイミングで分配することが課題となっている。

・保管場所もないので、分配を行うプラットフォームが必要。個々の農家さんなどにすべて負担してもらうのは限界で、中間支援を行ってほしい。

- ・農作物はどうしても時期（旬）があるため、品が偏る。調整・仕訳ができるステーションがあるとよいが、農協はそういったことはできないだろうか。

議題 2 農福連携相談窓口について

委員意見

- ・岡崎市の福祉施設から毎日安城市の農場に通って工賃を得ている人がいる。

岡崎市で時期ごとの仕事、内容の取りまとめがあれば手を挙げてくれる事業者もいるのではないだろうか。こういう人手がほしい、こういう連携ができるという話がまとまるといいのではないかと思う。

- ・農業で何が大変かという収穫作業が一番大変。障がい者もいろんな人がいるので、作業ができる人できない人がいるのではないだろうか。以前、障がい者を一人雇ってみたことがあるが、注意の仕方が良くなかったようで、会話ができなくなってしまった。作業する人への理解が必要だが、雇う側としては心配になってしまう。

- ・福祉施設の職員さんが間に入り、福祉事業者の知恵を出すことで農家さんが悩むことは減るのではないかと思う。指示の出し方としては「この辺をやっておいで」ではなく番号を付けて「何番の棚をやっておいで」と指示したり、「状態良い写真・状態の悪い写真」みたいなもので具体的に判断を覚えさせるなどが良い。

- ・福祉団体としても、就労先としての農業への需要はあると思う。いろんなことをやっている中の一つの仕事としては選択肢になる。

- ・農業を福祉施設の仕事として考えると、作業の波があるのが難しい。季節であるなが大きいこと、普段の日常の仕事をどうするか、うまく調整しないといけなくなるため、この季節はこの仕事、次の季節はこの仕事で途切れることがないようになるとやりやすい。

- ・仕事のロットが大きすぎると技術、作業キャパの関係で対応ができないこともあり、事業者ごとに受けやすい仕事があると思う。

- ・事業者さんが作業内容をどう伝えるのかというのは障がい者個々の性質によって違うので、ジョブコーチという支援者が付いて作業を伝える必要がある。しかし、仕事量の波があると困るけれど、単発の仕事だとジョブコーチの配置が福祉事業者にとって負担となってしまう。受ける事業者さんもあると思うが、声を広範囲にかけて手を挙げてもらえないと思う。

- ・岡崎市内の福祉事業者で直接農作業を行っているところが 11 事業所、農産物の加工を行っているところが 13 事業所、専業ではなく、副業的な扱いである。

- ・西尾市の方で、市がはちみつ、卵、牛乳を買い取って福祉事業所に委託して商品開発をし、プリンを作って高齢者施設に販売するというプロジェクトを行った。

その後、プロジェクトは終わったが、そこでできた農産物とのつながりなどでシフォンケーキなどを今も作っていると聞く。このような形で、将来にもつながるように、農業と福祉のつながり方を相談できる窓口があると良いと思う。

- ・記念品として福祉施設に発注して全量買い上げるという形については、岡崎市内の農業関係の総会では、記念品などは減っているが、そのような方法もある。

- ・福祉事業者側としては、畑で作った野菜をお金に換えたいので、継続して売りさばく先が欲しい。産直市場などに職員が個人で持ち込んで売などの方法だと売り上げが上がり、農業がほかの仕事のサブの位置から変わらなくなってしまう。

- ・農作業に関わっているとき、職員も利用者も楽しんでいるので、野菜や加工品が安定した取引先に売れるような仕組みがあると本格的に関わっていけるようになると思う。

- ・農福連携の話を聞いていると、農産物のロスを減らすために6次産業化を頑張ることになって、結局大変でうまくいかなかったのが重なって見える。

- ・福祉事業者が自分たちで野菜を作っているのなら、草刈りだけとかではなく、農家になって、たくさんある遊休農地をやれるのではないかなと思う。

- ・大型機械を入れて畑を耕したり、草刈り機で一斉に刈ったりすると、障がい者は植え付け、収穫だけやるとなってしまう、出番がなくなってしまう。

- ・障がい者もやってもらえるように道具に工夫がいると考え、利用者が使えて効率のいい道具の工夫を始めている。一例をあげると、草刈りでナイロンコードを使い、草の跳ね返りが少ないカバーの大きいものを使ったりもしたが障がいの傾向によってはそれでも扱いが難しかったため、高齢者用の車付きの草刈り機で練習してもらったりしている。

- ・人海戦術でやるのも最初の立ち上げにはいいが、継続してやっていくことは難しい。普段は少ない人数でやるように道具を工夫しているが、ものによっては貸し出しがあるとありがたい。

- ・社会福祉法人側も職員の入れ替わりがあるため、農業の経験が豊かな人が常に携われるとは限らないので、短期で参加しやすい研修や、アドバイザーの派遣が気軽に頼めるようになってほしいと思う。

- ・余った野菜を寄付するとかでもどこに相談するかがわからないので、知る機会が欲しい。岡崎市でも施設内で野菜を作っている事業者があるということも、友達に教えてもらってはじめて知った。

- ・女性部員も高齢化していて、なかなか新しいこととの接点がないが、コミュニケーションをとって農福連携について広められれば、アドバイザーなどで関わりたいという人も出てくれるのではないかなと思う。

- ・農業と福祉のことでどのようにニーズを持っている人の悩みを解決につなげるかということで、社会福祉協議会の機能はどうだろうか。子ども食堂については寄付の窓口になるなど、非常に支援している。持っている情報、ノウハウを農福連携の分野にも生かして学区ごとの事例づくりなどに生かせるのではないかな。市の

福祉部局との連携だけでなく、地域福祉との連携をしていけるように考えてほしい。

マスコミが子ども食堂について報道したら大きく取り扱われるようになったので、農福連携もそういうニュースがあれば広がるのではないかなと思う。

外出自粛中で需要が少なくなっても野菜はできてしまうので、高齢者でも障がい者でも、作った野菜を収穫、消費販売するという流れができることは良いことだと思う。

地域の人たちが共通の意識、熱意をもってやれるかどうかは課題だと思う。

障がい者に対する接し方が難しいということを初めて知った。障がい者のことをもっと学ばないといけないと思う。